

第308回 越谷市郷土研究会 史跡めぐり 資料 平成14年11月12日

## 午 年 総 開 帳

# 秩父札所 34ヶ所 めぐり

## 3回コースの3回目

- (21) 観音寺 (22) 童子堂 (23) 音楽寺 (24) 法泉寺 (25) 久昌寺  
(31) 観音院 (32) 法性寺 (33) 菊水寺 (34) 水滸寺 以上9ヶ寺

越谷市郷土研究会

## 観音信仰はいつ伝来したか

これまでアジアの観音信仰を紹介してきたが、観音を厚く信仰することにおいて日本人もまた決して他の東アジアの人々に劣るものではない。

日本の観音信仰がいつ頃伝来したかということは文献的には不明である。しかし、東アジアの観音信仰の伝播の状況からみると、わが国へも、すでに古代から入っていたと思われる。

中国では北魏時代（南北朝時代の北朝の最初の國、三八六—五三四）に、すでに観音像が造られており、観音に関する經典も流行していたので、観音信仰が盛んであつたと思われる。この北魏の観音信仰は三国時代（朝鮮半島に新羅、高句麗、百濟の三國が鼎立していた時代、四一七世纪頃）に朝鮮に伝わっている。

中国で造立された観音像が三国時代の朝鮮での造像を促し、さらにそれが七世紀の飛鳥・白鳳時代の日本へ伝来してきたのである。大化前代（大和朝廷時代末期、六、七世紀頃）以前における日本の観音信仰の伝来と造像については文献上の記載はなく、また紀年銘文がある観音像の遺品もないので、明確に何年何月に日本に伝来したということはいえない。しかし、すでに「法華經」が日本に伝来していたことは確かであるから、「法華經」の「普門品」、すなわち「観音經」も入つており、それに伴つて信仰もあつたものと推定できる。

中国の隋の開皇中（五八一—六〇〇）の記事によると、聖徳太子（五七四—六二二）が遣隋使を送つてきて「法華經」を求めたことが、「宋史」卷四百九十一「外国伝・日本國」に記されている。

聖徳太子は「法華經」「勝鬘經」「維摩經」の三經の義疏（注釈書）を撰述したといわれる所以、当時、「法華經」が伝来していたことは明らかである。

また、聖徳太子は推古天皇の一年（五九三）に「篤く三宝（仏教の基本である仏・法・僧）を敬へ」という三寶興隆の詔を下した。奈良時代にてきた我国最古の勅撰の正史である「日本書紀」推古二年の條に、つぎのようにある。

二年の春一月、皇太子及び大臣に詔して、三宝を興隆せしむ。是の時、諸臣連等各々君親の恩の為に競うて仏舎を造る。すなわち是を寺と謂う。

これにより寺院が多く造られたことがわかる。

「上宮法王帝說」は、太子が建立した寺として、四天王寺、法隆寺、中宮寺、蜂丘寺、池後寺、橘寺、葛木寺の七カ所をあげている。中宮寺、橘寺、それに法起寺（池後寺）などは太子が直接建てたのではないといわれているが、太子が寺院を多く建て、仏法の興隆に意を用いたことは明らかである。

## 「観音の化身」聖徳太子

このように仏教を崇敬した聖徳太子を、昔から、「観音の化身」として崇敬する伝承がある。聖徳太子を観音の化身と信仰することは、太子の事蹟や人となりから考えて当然であるかもしれない。

聖徳太子の誕生に関しても、観音に関する伝説がある。聖徳太子の母の夢の中に、容儀美しい金色の僧が現われ、「我は救世の菩薩なり。しばらく后が腹に宿らん」と言つて胎内に宿られ、生まれたのが太子であり、聖徳太子は観音の化身であると伝えられているのである。

さらにまた太子がもつとも聖なる冥想の道場として、しばしばその中に「三昧定」に入り、金人から妙義を聞いたという夢殿に、太子は念持仏として救世観音像を安置したと伝えられているが、この観音は「太子等身の観音」として有名なものであり、後代になると太子すなわち観音として信じられるようになった。

(二六二)は、「皇太子聖徳奉讃」という和讃の中で「救世觀世音大菩薩、聖德皇と示現して、多々(父)の如く捨てずして、阿摩(母)の如くそい給う」と詠んでいる。聖徳太子が観音の化身であるという信仰に基づいて観音信仰は、我が国の民衆に深く浸透したものと思われる。

### 観音信仰を伝えるもの

伝説ではなく歴史的事実としての日本における七世紀の観音信仰については、文献には明記されていないが、仏教文物によつて確証できるものがある。

たとえば、法隆寺夢殿の救世觀音は「天平十九年法隆寺東院資材帳」に「太子等身觀世音菩薩像」と記されており、わが国初期の観音像の一つである。資材帳がつくられた天平十九年は七四七年であるが、観音像はすでに述べたように、聖徳太子が生存中に自ら夢殿に安置した観音像である。さらに辛亥年(六五二)銘觀音像(法隆寺献納宝物、東京国立博物館)には紀年銘があることから、七世紀中期頃には観音像が日本において造像されたことは明らかであり、観音像が造られていたということは、観音信仰も行われていたとの証拠になる。

### 「観音經」と観音像の成立——奈良時代

和銅二年(七一〇)、平城遷都とともに官寺の造営と造仏事業がさかんに行われるようになつた。

国家のための仏教とは、正しい經典を基本とし、それに基づいて仏像を造り、戒律を守る僧侶が正しく經典を読誦して法会を行い、また修行に励んで、國家の安寧を祈願するものである。

經典に基づいて正しく仏像が造られるようになつたのは、天平七年(七三五)、玄昉(?-七四六)が五千余巻の經典を中国から持ち帰り、名実ともに國家仏教(律令仏教)への体制が整うようになつてからであつた。

護國三部經典としてすでに前からあつた「仁王經」「法華經」に加えて、奈良時代の「三論宗の僧道慈(?-七四四)」が、唐から持ち帰ってきた新訳の「金光明最勝王經」が、旧訳の「金光明經」に代わつて三部經に採用され、官俗による転説、誦經がさかんに行われるようになつた。

國家安寧の祈禱を行つ重要な經典の一つが「法華經」であつたため、その「法華經」の中の「觀世音普門品」も人々に広く知られるようになり、この「觀世音菩薩普門品」が独立した經典として流行し、現世利益を叶え、苦難を救つてくれる「觀音經」として広く書写され、読誦されたのである。

たとえば「日本書紀」卷二十九の朱鳥元年(六八六)七月の条には、天武天皇(六七三—八六在位)の病氣平愈を祈つたといふ次のような記述がある。

この月に、諸王臣等、天皇の為に、觀世音像を造る。すなはち觀世音經を大官大寺に説かしむ。

天皇のために觀音像が造られ、また「觀世音經」を大官大寺において誦經させられたのである。さらにその年の八月には、つぎのようにある。

庚午に、僧尼并て一百を度せしむ。因りて、百の菩薩を宮中に坐えて、觀世音經二百巻を誦ましむ。

僧尼百人を出家させ、百体の觀音の画像、または造像を安置して、「觀世音經」二百巻を誦誦させたといふのである。「二百巻」といふことは「一百回にわたつて誦誦させた」とことになる。觀音像の造立と「觀音經」の誦誦および書写は、奈良朝になつてもさかんに行われた。

聖武天皇の天平十二年(七四〇)には、百姓の平安を願つて、国別に、高さ七尺の観音像を造立し、「觀世音經」十巻を書写させた「続日本紀」卷十三という。

### 護國のための仏教

さらに、観音像の造立については、同じく聖武天皇の神龜五年(七二八)八月に、皇太子の病いの平愈を祈願し、観音像百七十七体を敬造し、「觀音經」百七十七巻を写経させたと。百七十七体の観音像といえばたいへんな数であり、観音像を造立することが、病気平愈などの現世利益、百姓の平安、国家安寧のために流行したことを見ている(同卷十)。このような大規模の観音像の造像は、白鳳期とは比較にならないほど多くなり、奈良朝における観音信仰の高まりを知ることができる。ただし、それは民衆レベルのものではなく、朝廷を中心とした國家仏教レベルのものであった。観音もまた、護国的菩薩として受け入れられていたのである。

天平十二年(七四〇)、宮中で権力をにぎっていた玄昉の追放をとなえて、藤原廣嗣が九州で挙兵すると、朝廷は国ごとに高さ七尺の観音像を造り、「觀世音經」十巻を書写させて、反乱の鎮圧を願つた(同卷十三)。これはおそらく唐で密教を学んだ玄昉の発案によるとと思われるが、玄昉の失脚後も、観音の護国的な靈験に対する朝廷の期待は変わらなかつた。

その後も橘奈良麻呂の乱や県犬養姉女の陰謀などのさまざまな反乱や事件が起ると、天皇は、反乱や陰謀を未然に防げたのは盧舍那仏や觀世音、四天王の「不可思議な威神力」によるものだと詔書をもつて宣べている。ここにおいて観音は、東大寺の盧舍那仏(大仏)や四天王と同じような鎮護国家の利益をもたらす仏像として受け入れられたのである。奈良時代には、観音は、国家を転覆しようとする敵から国を護る護国菩薩として信仰されたのであつた。

前に述べたように「觀音經」(法華經普門品)は、観音が人々の願いに応じて三十三身に姿を変えて救いを求める人々の前に現われることを説いていて、観音という菩薩の中には、さまざまの変化身(三十三身)が内在していた。だからこそ、人々の願いに応じて臨機応変に多くの変化身が尊像として造型化されるようになつたのである。そのため観音の造像も多様な展開をするようになつたが、それに拍車をかけたのが、唐代の仏教の密教化である。

ことに天平七年(七三五)に帰国した玄昉が、唐の代表的な經典目録である「開元釈教錄」にもとづいて請來した經典の中には、変化観音と称される十一面観音や不空羈索観音、千手観音、如意輪観音などに關係のある密教の經典が含まれていた。そのため天平年間(七二九—七四八)を境にして多様な観音像が造られるようになった。それらの変化観音は、後の日本人の心の中に深く投影され、多くの信仰者を生むことになつたのである。

それでは、奈良時代には具体的にどのような観音が造像され、崇拜の対象とされたのであろうか。まず千手観音像について考えてみよう。

### 変化観音の由来

わが国では天平七年(七三五)の玄昉の帰朝以後に初めて千手観音像が造られたといわれている。天平十三年(七四一)の「玄昉發願經」の残巻(京都国立博物館蔵)の奥書によると、この年、「千手千眼陀羅尼經」千巻の書写が行われ、聖寿の無窮と、天下万民の安寧を願つたという。

当時の千手観音像としては、奈良西ノ京の唐招提寺の千手観音菩薩立像をあげることができる。その木心乾漆造の巨像は、千手を持つ造形であり、経典の解釈がそのまま形象として表現されている。千手観音はその千の手で、広大無辺の慈悲を施すとされたため多くの人々の尊崇を受け、後の西国三十三所の観音靈場のうち、ほぼ半数の寺院が千手観音を祀つており、千手観音がいかに盛行したかがわかる。

また、京都の三十三間堂として有名な蓮華王院本堂には一千一体の千手観音が祀られている。建長元年（一二四九）の火災後の復興には仏師湛慶がかかり、とくに中尊の千手観音坐像は湛慶作といわれる傑作である。

十一面観音の代表作としては、奈良の法華寺の十一面観音菩薩立像が有名であり、聖武天皇の皇后であつた光明皇后の姿を写したものといわれている。

そのほか、奈良聖林寺の十一面観音は天平期のものといわれ、近江地方や若狭をはじめ全国各地に散在している十一面観音像が造られた年代は、奈良・平安から鎌倉時代におよぶものであるといわれる。

そのほかの観音としては、不空羈索観音や如意輪観音などが造像された。不空羈索観音の代表的なものは、奈良東大寺の法華堂の一面三目八臂像が有名である。多数の宝石で飾られた宝冠を戴いている。造立は東大寺で初めて法華会が行われた天平二十年（七四八）ごろと考えられている。奈良興福寺の南円堂の本尊の不空羈索観音も天平十八年（七四六）に造られたものであつたが、治承の兵火に焼かれ、現在のものは鎌倉期の康慶作のものである。

如意輪観音は道鏡（？—七七二）と密接な関係にあつた。ちなみに、道鏡が接近した孝謙天皇（称徳天皇）の念持仏は、如意輪観音像であつたといわれる。大阪観心寺にある如意輪観音像は、空海の密教の流れをくむ彫像といわれ、豊満華麗でなまめかしくさえあるが、九世紀の作といわれている。

九州福岡の觀世音寺には、延喜五年（九〇五）の『觀世音寺資材帳』に記載された四面三目八臂の馬頭観音像がある。

なお、奈良の大安寺には天平期のものとされる楊柳観音像がある。唐から帰朝した留学僧道慈ゆかりの観音像とされ、檜の一木造りで、忿怒の形相をしており、楊柳観音の名称は後世つけられたといわれる。

このように主として奈良時代の八世紀には「普門品」の観音から多くの変化観音像が造られ、信仰されていったのである。

#### 六觀音の成立と展開——平安時代

六觀音とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道の救主とされる六体の観音のことである。大悲、大慈、師子無畏、大光普照、天人丈夫、大梵深音の六觀音をいうが、一般に台密（天台宗の密教）では順に、聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、不空羈索観音、如意輪観音の六觀音とする。東密（空海の真言宗の密教）では、不空羈索観音の代わりに准胝観音とする。以上の台密、東密の観音を合わせて七觀音ともいう。

六觀音の起こりは文献的には、天台大師の著書『摩訶止観』（卷二上）の記述に基づくとされる。

六字の章句陀羅尼はよく煩惱障を破し、三毒の根を淨め、仏道を成すこと疑なし。

六字とは六觀世音なり、能く六道の三障を破す。

大悲觀世音は地獄道の三障を破す。

大慈觀世音は餓鬼道の三障を破す。

大光普照觀世音は畜生道の三障を破す。

大梵深音觀世音は天道の三障を破す。

大慈觀世音は阿修羅道の三障を破す。

大悲觀世音は人道の三障を破す。

大梵深音觀世音は天道の三障を破す。

この記事にみられるように、六道輪廻の苦しみを救ってくれるのが六觀音なのである。

## 六觀音信仰

このように「摩訶止觀」が説く六道抜苦（苦しみを抜く）の説をもとに地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道輪廻の苦を救う觀音として止觀六觀音が提唱されたのであるが、現実にはこの止觀六觀音の形を伝える造像は存在しない。

日本における六觀音の造像として流行したのは真言六觀音である。

真言六觀音とは、平安中期の真言宗の僧で、小野流の祖仁海（九五一—一〇四六）がはじめたものといわれる。小野流では大悲觀音は聖觀音の変化身で地獄道を救い、大慈觀音は千手の変化で餓鬼道を、師子無畏觀音は馬頭の変化であり畜生道を、大光普照觀音は十一面の変化身で阿修羅道を、天人丈夫觀音は准胝佛母で人道を、大梵深音觀音は如意輪の変化身で天道を救うと説いた。これが後世のいわゆる六觀音説の始まりといわれる。その特色は准胝佛母を觀音としてとりあげたところにある。

このような六觀音信仰は、当時の貴族社会にも広く受け入れられた。平安朝以来、六觀音の造立も流行し、万寿元年（一〇一四）六月、藤原道長は法成寺薬師堂に七仏薬師とともに六觀音を供養した（薬師堂供養記）という。また長曆四年（一〇四〇）十月、藤原頼道の夫人が円城寺安樂堂に、等身の六觀音を供養した（円城寺堂社便覽）という。

そのほか六觀音造立供養の記事はいろいろな文献に出てくるといわれる。六觀音信仰は、民間にも流布して靈山聖地の岩壁や路傍などに六觀音の石像が安置されるようになつた。

## 個人を救う觀音へ

平安時代には、没落した貴族や民衆の間に、六道輪廻の思想や地獄思想が浸透するとともに、厭離穢土、欣求淨土、六道輪廻抜苦の欲求が高まり、觀音は、現世利益的性格だけでなく、来世的な救苦的性格を持つようなものとして信奉されるようになつた。こうして、十世紀の貴族社会に六觀音の思想が定着し広まつたのである。

奈良時代には、觀音は國家安寧という護國的な役割を果たすために信仰されたが、平安時代になると六道に迷う亡者を救い、淨土に導こうとする個人的来世的信仰として信奉されるようになつた。

そして、一般民衆の参詣や巡礼の対象として觀音靈場がつくられていったのも平安時代と考えられる。平安期にさかんであつた熊野詣は觀音信仰と深い関係があるとされるが、西國三十三所觀音巡礼の起源も平安時代である。三十二の数は、觀音の三十三應身に由来するが、西國巡礼の靈場は近畿地方に集中している。後に述べるように西國巡礼の始祖は徳道上人、中興したのは花山法皇（九八四—九八六天皇在位）とされるが、實際には平安朝の中頃ではないかといわれている。

その後、鎌倉時代の武士階層にも多くの觀音信者を生んだ。さらに鎌倉から室町時代にかけて、觀音信仰は民衆化し、西國巡礼にならつた觀音靈場巡礼が全國にもできるようになり、坂東觀音靈場、秩父觀音靈場が成立した。秩父觀音靈場はとくに三十四カ所とし、坂東、西國と合わせて百觀音巡礼と呼ばれている。

## 觀音札所の成立

巡礼思想はその由来するところはきわめて古い。もちろん日本人に限られた思想ではなく、インドおよび中国においても古くから行われ、それが日本に伝来したのである。僧侶のみならず、一般の信徒もまた、諸国の靈場を巡拝したのである。平安朝より鎌倉時代にかけ、こうした人々の群は、深山に分け入り、花野をよぎり、巡礼の姿はいたるところに見られたという。

戦国時代に入つて、戦乱で交通の危険が多くなつたため、巡礼は一時期衰退したが、徳川時代になると、庶民の間に起つた觀音信仰熱とともに、廻國巡礼は、信仰の証しとさ

れるようになり、笈（竹製の折箱）を負い杖を曳き、観音の靈験を受ける巡礼が流行するようになった。

西国三十三所靈場は、花山法皇の巡拜からはじまつたといわれるが、三十三所観音巡礼自体は、すでにその以前から行われていたことから、それ以前に、先に述べたように徳道上人によって創始されたのではないかといわれている。

大和國長谷寺の開山徳道上人は、養老二年この世を去り冥土へ赴くと、焰魔大王に迎えられ「汝が住む日本には観音淨土というべき靈場が三十三カ所ある。しかるに衆生はこの靈場のあることを知らないので巡礼の心も起さず、善根をなす術も知らずにいる。汝は、觀音淨土三十三所の靈場を世に弘め、巡礼の心を起させらるならば、衆生は惡道をのがれて善所に生まれることができる。三十三所巡礼の功德はこの通りであるので、これを汝の力によつて広めさせたい」と言われ、娑婆に送り返してもらうことができた。蘇生した上人は、あまたの道俗を引き連れて、三十三所巡礼の先達となつたという。

もちろんこれは伝説であるが、上人の観音信仰が、その一因となつたことは理解できよう。

### 花山法皇

三十三カ所の觀音靈場を開いたのは先に述べた花山法皇である。法皇は十七歳で天皇位についたが、十九歳で出家して花山法皇となつた。

大和の長谷寺に行幸した花山法皇は、得度の戒師を求めるに、法皇の發心に感心してか觀音のお告げがあり、河内國石川寺の仏眼上人が戒師にふさわしいと言われ、さらに石川寺に行き、得度授戒を受けたのであつた。

法皇が仏眼上人に最善の報謝は何がよいかと聞かれたところ、上人は、「今より二百七十年前、徳道上人によつて創められた三十三所巡礼を再興なさることこそもつとも勝れたご淨行です」と奉答したという。

法皇は播州晝写山に行幸し、性空上人につき觀音巡礼の功德を讚えてから、いよいよ巡礼再興の誓願を立て、仏眼上人を導師に、性空上人、中山寺の弁光僧正らをお伴にして永延二年（九八八）三月に巡礼に発足したという。

まず熊野権現に参り、那智山に詣で、一カ所一首の御詠歌を作つて納めながら、紀三井寺、粉河寺に参籠し、河内、和泉、大和、山城、丹波、攝津、播磨、丹後、近江と、順次に修行を重ね、同年秋、美濃の谷汲山に打ち納めた。

花山法皇のおよそ百八十年後の承安（一一七一—七四）の年、後白河法皇も、千有余人を召し連れて、花山法皇の事蹟を、一齊にご詠歌を唱えつつ巡礼した。

靈場が三十三カ所に限つてあるのはすでに述べたように『法華經普門品』の三十三應現に因んだものである。鎌倉初期にはすでに三十三所の称呼があるといわれているから、三十三所の定め方があつたのかも知れない。

東国の人たちが巡礼する場合、まず第一に目指したのは伊勢神宮であり、それから熊野路を経て那智山に出るのが順序であり、ついて紀伊、和泉、河内、山城、丹波、攝津、播磨、丹後、近江と廻り、最後に美濃に詣でるのが東国に帰る都合のよい道順となつてゐる。これらの人々によつて言いならわされ、西国巡りの言葉がいつか三十三所の上に冠されて、西国三十三所の名が定着したのであろう。

### 鈴木正三の教え

江戸時代のはじめ、觀音を信仰し、西国三十三所を巡礼することの大切さと、その心がけを説いたのが鈴木正三（徳川二代將軍の頃、武士から禪者になつた）であつた。

その心得を要約すると、（一）行脚の間はひたすら觀音を信仰すること、（二）觀音を念じ、觀音とともに巡礼すること、（三）觀音を常に念じ、数珠を持ち、經を読みながら巡礼すること、（四）一堂ごとに觀音經三十二卷ずつ読誦すること、（五）一堂ごとに觀音經一

巻を書写することが、大切であるという。

このように『観音経』を説誦し、書写し、観音を一心に念じて西国三十三所を巡拝すれば必ず観音はその人を守護してくれるという功德が説かれており、この正三の教えのように、多くの人々が西国三十三所を巡礼したことがわかる。

観音靈場は現在全国各地にあり、観音を信仰する人々の巡拝を集めている。

筆者の周りを見廻しても、亡き子や、亡き伴侶の菩提を弔つて靈場巡礼を続いている人がおおぜいいる。東京の浅草観音にも香華の煙が絶えないし、高崎には高崎観音、大船には大船観音の大きな造像がある。山を歩けば観音の石仏に出会うし、念持仏に観音像を祀る人も多い。特定の宗教をもたない民族といわれる日本人だが、われわれの心の奥には深く広く水脈のように時代を越えてインドに発した観音の面影と信仰が流れつづけているのではないか。インドに発した観音信仰が中央アジアや南海を経て中国に伝えられ、さらに中国人の現世利益の願いをかなえてくれる菩薩としてさまざまな観音が生まれ、それらの観音は朝鮮や日本にも伝えられ、我が国においても多くの信仰者を生み、人々の心に生き続けているのである。

観音のきた道 鎌田茂雄著 講談社現代新書 講談社 1997.2刊

田舎歩きをして、鉛  
の音を聴かせながら野道や  
山道を歩く。巡礼などとい  
うなんイメージが思い浮か  
ぶ。

「巡禮（おこし）」を  
羽織り、白い手甲、脚半を  
つけた身姿。それほど數  
枚や羽織（はおり）の一組の  
鎧装束（よろい）、小物入れの頭陀袋  
(あたぐい)なども頗るに  
つか、菅笠（すみがさ）を  
かぶり、金剛杖（こんごう  
ざう）を持つというのが伝  
統的な巡礼の装束といわれ  
る。

札所を進む中、バスで  
訪れる参詣客が山間歩き  
多いこと知ついた。巡礼者  
たちはそろって歓迎し、こ  
詠歌をうたい、納経を受け  
る。お詫びの仕方を教えて  
くれる専門家がいて、伝統  
的な参詣が行われているの  
だけれど、どの札所で出金い  
ても、巡礼者たちの装束の  
ほとんどが田舎歩きだ。

## □21番 観音寺 (かんのんじ)

森朴なたまほの本堂

田舎歩きだけではない。一

人で巡礼してくる人々夫婦

連れで、軽装が多じよひに

感じ。歩いて札所巡り

している人たちに共通してい

るは、歩きやすい靴を履

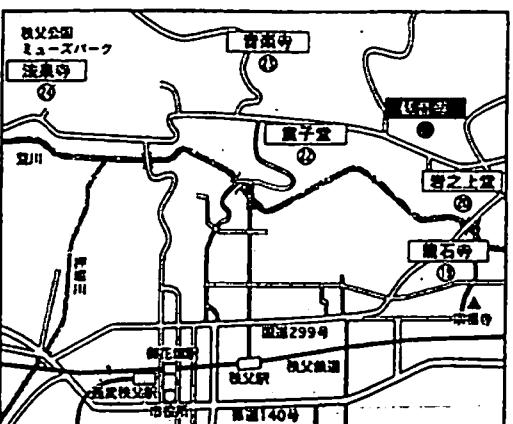
き、バックを背負つてくる

といふのと想ひ、秩父路を

歩くのだから、当然の格好

かもしねば。

秩父札所連合会発行の  
「秩父札所めぐら」を基に



を回るのと田間がかった  
と語る。轟車やバスを使  
わざと秩父札所を巡るのは  
最低五百円が必要だ。

二十一番観音寺は、荒川  
二(一九〇九)年死去)

いきよひごとひの、井財  
天碑だしが立つ。また、観  
音寺前の県道わきには地蔵

居大和座の墓頭で明治四十  
二(一九〇九)年死去)

すんなり境内に入  
れる。正面の本堂

寺という感じが色  
濃く、庶民的な雰  
囲気が漂

う。「本尊 球體世音  
菩薩 桂樹（あやざね  
み） さる天の御子）わづ  
てきし ねがしき」あ  
たるひにしき

【メモ】お香からの徒歩13  
分(0・9km)。西武秩父  
駅から西武観光バス小鹿野  
原行きを乗車行きで「尾  
田時学校」下車、徒歩7分  
22番へは徒歩5分(1・4  
km)。(木屋町交差点)

た中村十九郎(ともじゅ  
うろう)の墓が建ち、地蔵  
窟が壁へだたた秩父の歴史  
を伝えている。

○  
要光山 銀閣寺 高圓寺  
草山原 秩父市街2335  
4・電話0-494-24-7  
2603  
本尊 球體世音  
菩薩 桂樹（あやざね  
み） さる天の御子）わづ  
てきし ねがしき

## 地芝居の歴史刻む

# 庶民的感じの本堂



単純に計算すると、札所を  
歩く距離は九八・四キ。同  
じく連合会指定の札所案内人組

識「秩父札所案内協力会」  
が毎年春先に行つてこ  
る「秩父札所徒步巡礼」は五  
編市の女性が、三十四カ所

在慶久丘上の県境では、秩  
父川源(ねり)近くにある。坂  
や石段はなく、疊道があり、

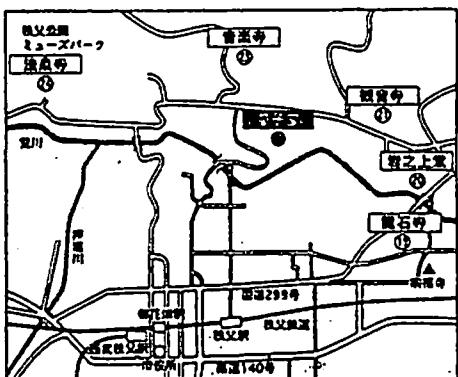
道筋を保んで観音寺前に迷つた観音寺の路筋

村十九郎の墓

「十一 締から縫」武田  
を睨みながらの栗原時政、铁  
父黒川綱(くわん)を睨み、「十一  
番傳子室に向ひ。平坂は  
巡礼道だ。東に法輪院門  
の山は西蔵だが越り成  
秩父路の風景を深つむん  
がド地図。  
　萬曾は、柴原を左に抜  
れた道の先にゐる。入人口  
の柴原社には、大きなお  
地蔵が立て、「十一番傳入  
口」と彫ほれた石碑が建つ  
てこののじかからゆす。  
道なりにしめられて進むと  
左前方に柴原(かねる)山  
の山頂が見えてしい。  
　柴父所ひで、柴原御殿  
根の建築が残つてゐる。柴  
原子室の山門だが、山門  
山門は、因つたの思や柴原寺  
相あつて山門のひなたを  
翻訳を施してある。山門  
の右は北の山門の新築  
施してある。山門の新築  
あり、新しみが感じられる  
山門である。「萬曾山門」

□22番 童子堂 (どうじどう)

木門や扉の彫刻が見事な部  
子堂



本堂の軒下で腰を下す  
に、やがて心がけられたりなつ  
干しがせしめ、自由か  
め、自然か  
う持參した。  
ながく地元の人たがいに話を  
交わす。一期一金の縁がも  
しれないが、そんな出合いで  
物語じを參り、  
物語じを振り、  
振着と振り、  
舞つてくれ  
る。経営事  
仕している  
一人 同市  
赤田の小沢  
マサさん  
(せんは「梅  
十」)は参道  
にある梅の実を賣つてお  
く、当時の人が手作りの煮  
物なども賣つてゐる」と話  
す。参道には六木の梅の木  
があるが、梅十(せんは)  
徒歩25分(1~4歳)。

おおや様、本當の軒下にて腰を下す  
干しきは、じ、お茶をいかがなつた  
め、自宅な、ながら始元の人たむと話を  
ら持参した。交わす。一塊一金の錢かも  
漬け物、熱物なども參  
いのを確かだといふ。  
握者と握り

やがだつたんとがつぶがべ  
る。窓の外は晴れで、  
木の葉の音が聞こえ

当たひた。壁々ひつた  
たたかわが田舎歸だ。城  
内上り、舟を組んだ船賊隊  
の船をひき寄せ、弓矢攻撃  
地蔵、捕獲の手だけが死ま  
れた連隊などが並んでい

A high-contrast, black-and-white photograph showing a dark, textured surface, possibly a book cover or endpaper, with a vertical strip of lighter material visible along the left edge.

お茶の接待で交流も





御免の御用

二十四番法泉寺は、県道

7年（明治20年）に開通した  
小鹿坂の二十三番かい徒歩  
コースを歩いてみた。途中で  
県道との境を渡るといふな  
る。山の県道を南へ進んで  
「山」十四番目の入山口

□24番 法泉寺 (ほうせんじ)

石段の上にある銀杏堂

必を體へ、國育養の體へと運び、ひの國育養せ、正圓圓わきに上正圓を取るにんだ特徴ある機運が現いだる。近づけば、葉の左右に記された分野たる上正圓を越す越して眞のところ

# 堂の左右に仁王像 凝らした意匠に定評

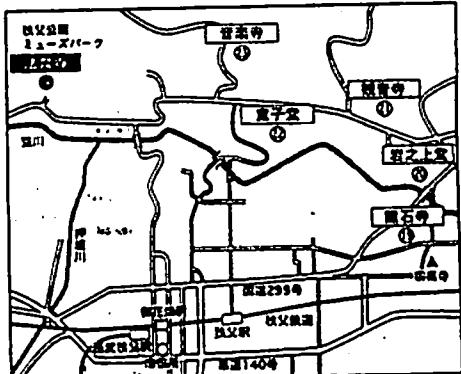
右鏡の前に進み、上を見上げてみると、あつすべたが、かなり急な斜面だ。画面には手すりが設置され、その手すりを手にしながら上る轟煙機を見掛けた。上り口に記(おつ)されたお地蔵さんや石碑の図をやつさがら上がり始め、百十ヶ所を数えたところで壊れ立つた。轟音機は、すべり目の前にある。轟音機は鏡を背後に見て、境内は鏡に映る

のほか、選出を離れた選

物も定説がある。

にある。納経を受けていた  
秩父市別所の守藤寛さん

甘露子  
卷之二



(中略) まことに、監視官は驚いた。彼の頭脳は余りにも鋭敏で、腕前もさうであつた。

「お前は今日十八日か。直  
島さんを出す。「船へ入  
つて『大絶叫回』が生徒とな  
って『大絶叫回』が生徒とな  
るがいい顔でやねえぞ。」  
お前がお出でなさい」と、

【火】25種から発送  
の(3・5%)・西武鉄交  
がるの西武鉄光バスミュー  
パーク遊園べで「田川」  
車、徒歩2分。25種へは  
券45分(2・0%)。  
(水曜日休館)

This high-contrast, black-and-white photograph depicts a dark, textured surface, likely a wall or floor. A prominent, lighter-colored vertical strip runs along the left edge. The right side of the image is heavily shadowed, creating a stark contrast.

新文元氣

札所を巡るうち、地元の

以前の名、母なるを聞いて  
不思議に思ったことがあ  
る。それやれ由来があること  
を知り、札所の歴史、伝  
統の理解を深めるきっかけ  
になった。取材を始めて間  
もなくたといふ所によつた該  
野堂（六番）、牛木堂（七  
番）などは強い印象を残つ  
てゐる。

□25番 久昌寺 (きゅうしょうじ)

水面に映る御室

御手判寺の名も残る

現地のものに近づいた。総理室から  
その説が漏れたりしなくてはいけない物  
だ。文部省出張部局と申します  
わの出張とは、西園寺公望第

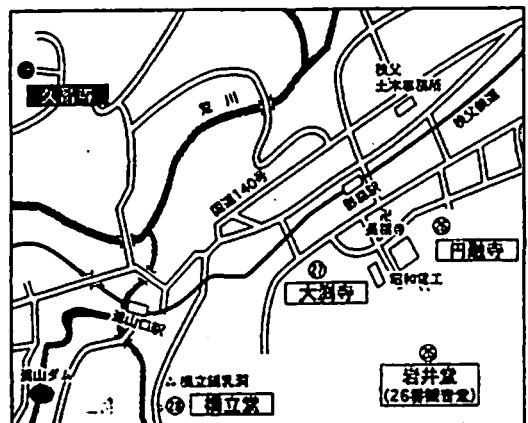
二十七番館寧山田教寺(兵庫県姫路市)の開山姓史上人をはじめ十三人の押着が残る。

風土記稿が記。岳藏の大恩を紹介してある。姓上人は徳源大王の招きて京府(あらわ)に赴いた際、石手羽のねれを貰ひ、填一枚、縫二六・五寸の綿の札に徳源大王の「手形」が白墨で刷られてある。

御手取寺の御方室かく

から教わひな。監院（えんま）大王の手形ひわれ  
る「御手印」を刷つた。お  
やうを要むられるのも同じ  
だ。禁がされたのは、御手  
印寺のいわれだ。秩父札所  
開創の伝説じゆくかわつ  
てふ。

This high-contrast, black-and-white photograph depicts a scene dominated by deep shadows. On the right side, there is a large, dark, irregular shape that appears to be a shadow or a solid object. To the left of this dark area, a bright, overexposed section of the image creates a stark contrast. The overall texture is grainy and noisy, suggesting it might be a low-quality scan of an older print or negative.



だ。心の内が露れながら、父兄十人十人連れて、お詫びの言葉を述べた。お詫びの言葉を述べた

今は釣り場にならじる  
が、かついせ、かどがく用  
のため超ないたとづか。  
納羅所がある久留美へ  
は、井田船和の船と済  
や通りでたゞ、本萬左衛門

【×中】24種か(種類45)  
分(2・8%)・株式鉄道  
浦江口駅及び浦河駅。26  
種く並地鐵品専(3・8%)。







所通り過ぎると、ほどなく  
三十三ヶ岳と會く。後進り  
口には、「善光寺が近づ。正  
面には「大樹山 妙福寺」、  
西面には「延命山 菊水寺」  
の二つの寺塔が認められ、札  
所の豪華さをうかがわせる。  
秋父札所最古の古文書

□33番 菊水寺 (きくすいじ)

たのか三十三年秋水は本所に移動した。

現在、三十三番の宗教法  
人としての寺母は授戒寺  
で、菊水寺は、通称。たゞ  
いづ、菊水寺の田地がどう  
にありたのがは、なお確認  
されていない。旧菊水寺の  
八〇〇年には再建された本

水寺へは、あらゆるもので  
船泊の松井田べへ出  
る。しかしいつの間に左  
に迷ひ、県田駅跡で右に  
折れる。直進すれば、小鹿  
野町奈良坂を通りて、吉  
田町小坂下（じのなか）地  
区を通りて、く徒歩道の  
ロードだ。

父社所置付」(興徳院文化財、法性寺蔵)に記、「十七ヶ小坂下」と記され、當時は「小坂下」の名で呼ばれていたことが分かる。徳川幕府が據さんした地誌「新編武藏風土記稿」には、「小坂下にあり、柴水寺と法寺」(と記してあるほか、柴水寺を管理する法寺即ち「長福寺」)といった記述している。その後、どんな事情があり



34番水潜寺

三十四番水潜寺は、日野町西部の山あいにある。同町日野沢地区を流れる溪流

・日野沢川の右岸近くだ。  
車を利用して参拝するのなら、同町根古屋地区から県道284号（下日野沢史門平吉田線）を日野沢川の上流方向に進めば、参道の前に出る。

歩く参拝するなり、札立（ふだたて）跡を越える

立（ふだたて）跡を越える  
巡礼道が有名だ。徳川幕府が廻さんした地図「新編武藏風土記稿」には「三十三番水潜寺所より、當村（下日野沢村）三十四番へ往来の時にて、難所なり」と記され、江戸時代の巡礼たちが札立跡を通っていたことが分かる。

## 胎内くぐりの岩屋も



そこからは、土の感触を感したところを踏みながら山道を上つて、途中から沢に沿つた急な下り坂が続く。「水潜寺はすぐそこ」と刻まれたこの石碑は、そのまま坂風山（六十三番から、赤川、その支流の吉田川を渡り、いつたん県道37号（日野西神荒



川線）に出てから札立跡を目指すコースだ。  
札立跡へ向かう道は、道の駅「船勢会館」がひやう遠くない。県道わざに巡つ平石（ひらなめ）脇頭尊室（青田町指定文化財）の前から左の道に入つて、札立跡の上り口まで、林道松坂苔路、作業道路母沢線を歩くこと約三十五分。

札立跡を下った沢の左岸に建つ御音堂

日野山 水潜寺 喬潤宗  
日野町下日野沢 352  
2、電話0484-62-3

金剛院 千羽 鎮守  
札所巡り

本尊 千手觀音

二藤歌 よみずよの願

いそごに納めねく苦

の下より いする水かな

曲身が震

時間 (8・9時) 桃太郎

2、電話0484-62-3

3、電話0484-62-3

4、電話0484-62-3

5、電話0484-62-3

6、電話0484-62-3

7、電話0484-62-3

8、電話0484-62-3

9、電話0484-62-3

10、電話0484-62-3

11、電話0484-62-3

12、電話0484-62-3

13、電話0484-62-3

14、電話0484-62-3

15、電話0484-62-3

16、電話0484-62-3

17、電話0484-62-3

18、電話0484-62-3

19、電話0484-62-3

20、電話0484-62-3

21、電話0484-62-3

22、電話0484-62-3

23、電話0484-62-3

24、電話0484-62-3

25、電話0484-62-3

26、電話0484-62-3

27、電話0484-62-3

28、電話0484-62-3

29、電話0484-62-3

30、電話0484-62-3

31、電話0484-62-3

32、電話0484-62-3

33、電話0484-62-3

34、電話0484-62-3

35、電話0484-62-3

36、電話0484-62-3

37、電話0484-62-3

38、電話0484-62-3

39、電話0484-62-3

40、電話0484-62-3

41、電話0484-62-3

42、電話0484-62-3

43、電話0484-62-3

44、電話0484-62-3

45、電話0484-62-3

46、電話0484-62-3

47、電話0484-62-3

48、電話0484-62-3

49、電話0484-62-3

50、電話0484-62-3

51、電話0484-62-3

52、電話0484-62-3

53、電話0484-62-3

54、電話0484-62-3

55、電話0484-62-3

56、電話0484-62-3

57、電話0484-62-3

58、電話0484-62-3

59、電話0484-62-3

60、電話0484-62-3

61、電話0484-62-3

62、電話0484-62-3

63、電話0484-62-3

64、電話0484-62-3

65、電話0484-62-3

66、電話0484-62-3

67、電話0484-62-3

68、電話0484-62-3

69、電話0484-62-3

70、電話0484-62-3

71、電話0484-62-3

72、電話0484-62-3

73、電話0484-62-3

74、電話0484-62-3

75、電話0484-62-3

76、電話0484-62-3

77、電話0484-62-3

78、電話0484-62-3

79、電話0484-62-3

80、電話0484-62-3

81、電話0484-62-3

82、電話0484-62-3

83、電話0484-62-3

84、電話0484-62-3

85、電話0484-62-3

86、電話0484-62-3

87、電話0484-62-3

88、電話0484-62-3

89、電話0484-62-3

90、電話0484-62-3

91、電話0484-62-3

92、電話0484-62-3

93、電話0484-62-3

94、電話0484-62-3

95、電話0484-62-3

96、電話0484-62-3

97、電話0484-62-3

98、電話0484-62-3

99、電話0484-62-3

100、電話0484-62-3

101、電話0484-62-3

102、電話0484-62-3

103、電話0484-62-3

104、電話0484-62-3

105、電話0484-62-3

106、電話0484-62-3

107、電話0484-62-3

108、電話0484-62-3

109、電話0484-62-3

110、電話0484-62-3

111、電話0484-62-3

112、電話0484-62-3

113、電話0484-62-3

114、電話0484-62-3

115、電話0484-62-3

116、電話0484-62-3

117、電話0484-62-3

118、電話0484-62-3

119、電話0484-62-3

120、電話0484-62-3

121、電話0484-62-3

122、電話0484-62-3

123、電話0484-62-3

124、電話0484-62-3

125、電話0484-62-3

126、電話0484-62-3

127、電話0484-62-3

128、電話0484-62-3

129、電話0484-62-3

130、電話0484-62-3

131、電話0484-62-3

132、電話0484-62-3

133、電話0484-62-3

134、電話0484-62-3

135、電話0484-62-3

136、電話0484-62-3

137、電話0484-62-3

138、電話0484-62-3

139、電話0484-62-3

140、電話0484-62-3

141、電話0484-62-3

142、電話0484-62-3

143、電話0484-62-3

144、電話0484-62-3

145、電話0484-62-3

146、電話0484-62-3

147、電話0484-62-3

148、電話0484-62-3

149、電話0484-62-3

150、電話0484-62-3

151、電話0484-62-3

152、電話0484-62-3

153、電話0484-62-3

154、電話0484-62-3

155、電話0484-62-3

156、電話0484-62-3

157、電話0484-62-3

158、電話0484-62-3

159、電話0484-62-3

160、電話0484-62-3

161、電話0484-62-3

162、電話0484-62-3

163、電話0484-62-3

164、電話0484-62-3

165、電話0484-62-3

166、電話0484-62-3

167、電話0484-62-3

168、電話0484-62-3

169、電話0484-62-3

170、電話0484-62-3

171、電話0484-62-3

172、電話0484-62-3

173、電話0484-62-3

174、電話0484-62-3

175、電話0484-62-3

176、電話0484-62-3

177、電話0484-62-3

178、電話0484-62-3

179、電話0484-62-3

180、電話0484-62-3

181、電話0484-62-3

182、電話0484-62-3

183、電話0484-62-3

184、電話0484-62-3

185、電話0484-62-3

186、電話0484-62-3

187、電話0484-62-3

188、電話0484-62-3

189、電話0484-62-3

190、電話0484-62-3

191、電話0484-62-3

192、電話0484-62-3

193、電話0484-62-3

194、電話0484-62-3

195、電話0484-62-3

196、電話0484-62-3

197、電話0484-62-3

198、電話0484-62-3

199、電話0484-62-3

200、電話0484-62-3

201、電話0484-62-3

202、電話0484-62-3

203、電話0484-62-3

204、電話0484-62-3

205、電話0484-62-3

206、電話0484-62-3

207、電話0484-62-3

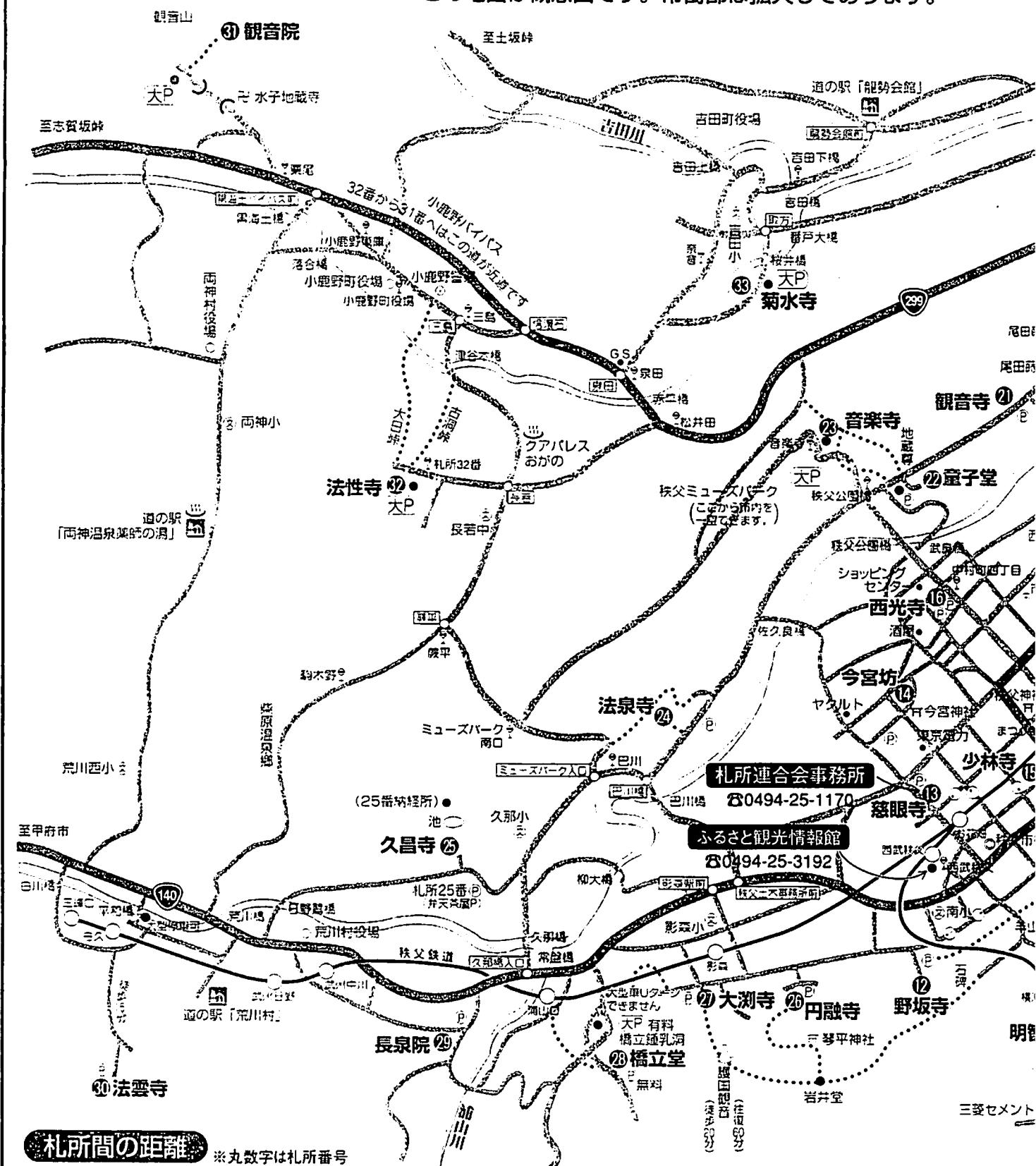
208、電話0484-62-3

209、電話0484-62-3

210、電話0484-62-3

# 秩父観音靈場34ヶ所案内圖

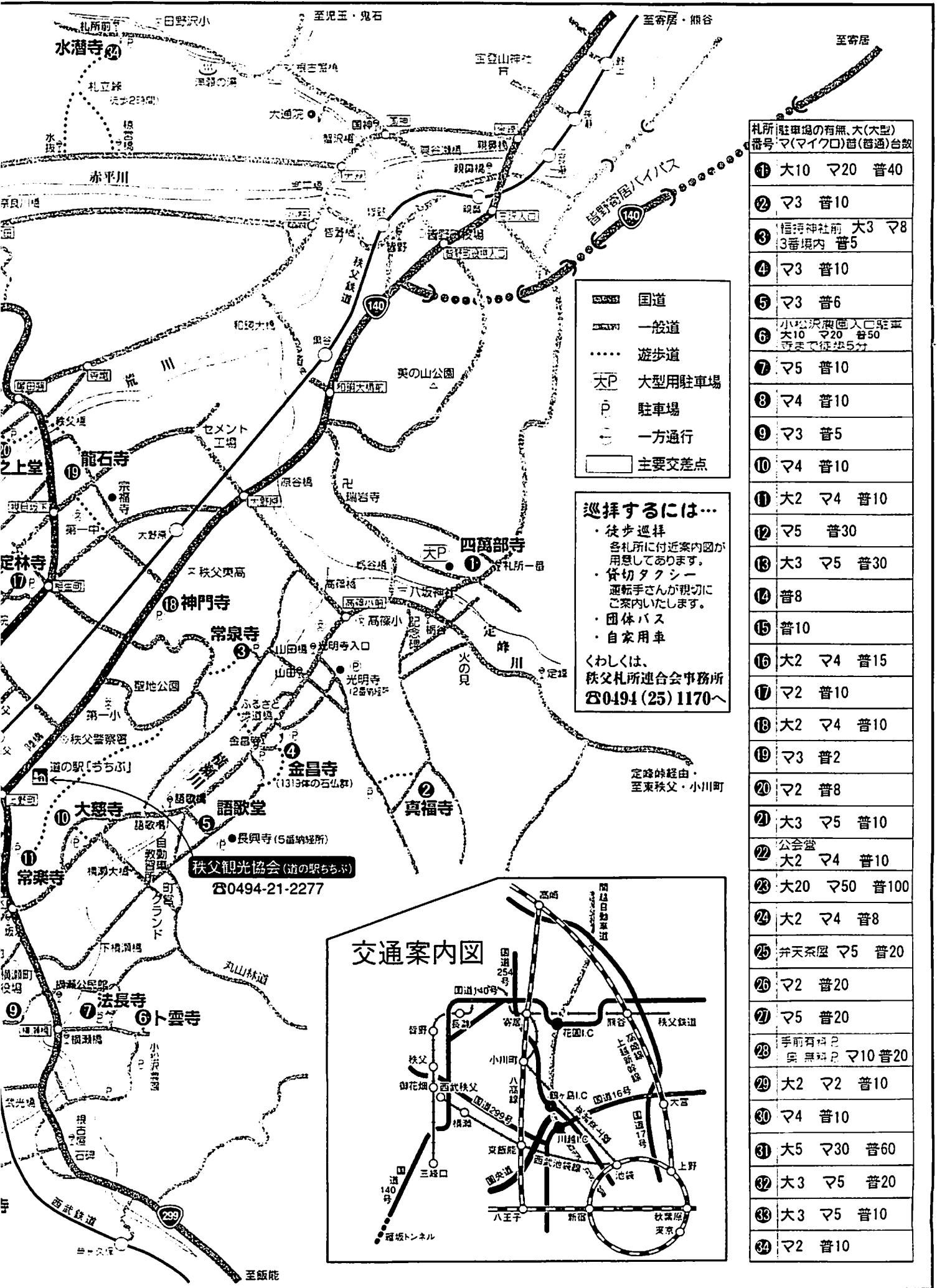
\* この地図は概念図です。市街部は拡大してあります。



## 札所間の距離

\* これらの数字は札所番号

- ① - 2.1km - ② - 2.5km - ③ - 1.4km - ④ - 1.3km - ⑤ - 2.7km - ⑥ - 0.7km - ⑦ - 1.2km - ⑧ - 1.8km - ⑨ - 2.2km - ⑩  
⑩ - 1.0km - ⑪ - 1.5km - ⑫ - 1.4km - ⑬ - 0.6km - ⑭ - 0.7km - ⑮ - 0.8km - ⑯ - 1.3km - ⑰ - 1.1km - ⑱ - 1.5km - ⑲  
⑲ - 0.8km - ⑳ - 0.9km - ㉑ - 1.4km - ㉒ - 1.4km - ㉓ - 3.5km - ㉔ - 2.9km - ㉕ - 3.8km - ㉖ - 1.4km - ㉗ - 1.2km - ㉘  
㉘ - 1.8km - ㉙ - 7.1km - ㉚ - 18.0km - ㉛ - 12.0km - ㉜ - 7.5km - ㉝ < (車) 15.6km ————— (歩徒:3~4時間) 8.9km > ㉞



交通案内図

